

人生の螺旋(らせん)



吉川英治の『宮本武蔵』を原作としながら、独自の解釈を加えて大ヒットした『バガボンド』という漫画があります。作者の井上雄彦さんは、東本願寺から依頼を受け、記念法要で親鸞聖人の肖像画を墨で描いた方でもあります。(ミニチュア版を、真光寺の玄関に飾らせてもらっています)

『バガボンド』は、宮本武蔵が「天下無双」を目指す物語ですが、決して爽快な活劇ではなく、その道程を「殺し合いの螺旋」という言葉で表現しています。

～ 宍戸梅軒との決闘後の場面 ～ 『バガボンド 13巻』井上雄彦 作 より

<宍戸梅軒> 「**殺し合いの螺旋から 俺は降りる**。俺を…助けてくれ。救ってくれ」
 <宮本武蔵> (戸惑いながら) 「…自分を斬った敵に 命乞いできるか? 生きて誰かを守るために…。俺は宍戸梅軒に勝った。だから 何だ?…」

私たちは武蔵のように剣は振るいませんが、**現代社会もまた、「螺旋」のようなものかもしれません。常に「何かの役に立て」「健康で若くあれ」「成長し続けろ」と、周囲からも・自らにも、追い立て続けられています。**何かを犠牲にして、一つ螺旋を上がっても、すぐに次の比較や競争が待ち構えています…。

今から1500年前、中国浄土教の祖と言われる曇鸞大師(どんらんだいし)は、私たち衆生の姿を「尺蠖(しゃくとりむし)の循環」と喝破しました。



この迷いの世界を深く見渡してみれば、そこにあるのは虚偽の姿であり、堂々巡りを繰り返す姿であり、終わることのない流転の姿である。
それはあたかも、尺取り虫が円を描いて元の場所に戻るかのようであり、あるいは蚕(かいこ)が自ら吐き出した糸によって自分自身を縛り上げるかのようである。 ああ、なんと悲しいことか。生きとし生けるものは、この迷いの世界に縛り付けられ、物事をあべこべに捉え、不浄な苦しみの中に沈んでいる。

『往生論註 ～総説分～』曇鸞大師 著 より

この螺旋から逃れるためには、「ただ自力の心をひるがえして、**他力(阿弥陀如来のはたらき)**に帰せよ」と曇鸞大師は言います。これは「自らの力で螺旋を登り切り、いつか完璧な自分になれる」という幻想を捨てることを意味します。そしてそのためには、**他力(私を超えたはたらき)**との出遇いが必要なのです。

武蔵の苦悩に共感を覚えながら、他力とは「**人生という螺旋の中でもがき続けている、この私のために用意されたもの**」だったことに気づかされます。

